

## 桂離宮御殿の造営過程における設計者の意図

建築デザイン研究室 a01t321 船橋耕太郎

### 1. 研究の目的とその方法

桂離宮御殿は日本建築史上特に美しいと称される建築物の一つである。本研究の目的は、桂離宮御殿において時代ごとに変化する設計者の意図を復元することである。桂離宮御殿は、まず八条宮家初代智仁親王によって古書院が造営され、続いて二代智忠親王によって中書院が増築された。その後、同じく智忠親王によって楽器の間と新御殿とが増築され、現在に見られるような御殿の全容が形成されたのである。

桂離宮御殿における造営毎に変化する設計者の意図の中には、使用者の視点及び観賞者の視点から生じる要求が存在していると考えられる。使用者の要求とは、建築物自体に対してそれを使用するという目的から生じるものである。観賞者の要求とは建築物を観賞対象として捉える視点から生じるため、使用者の要求とは全く異なる。それらの要求に応えるものを桂離宮御殿における設計者の意図として捉え、造営毎に分析する。

### 2. 御殿を使用する視点から生じる要求

造営毎の平面計画及び先行研究をもとに、部屋、部分の関係性をダイアグラム化する。つまりそれは使用者の要求の復元にあたる。

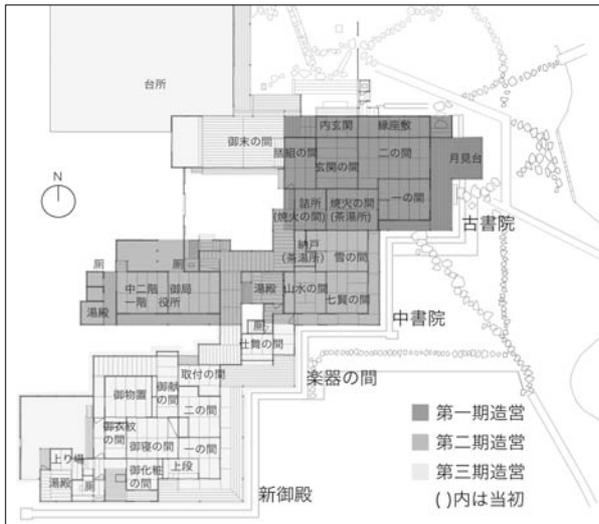


図1 第三期造営時の桂離宮御殿

#### 2. 1 第一期造営

古書院は庭に広がる池の西側に東南十九度という方位角で配置された。その方位角は、当時の京都において中秋の満月の出をいち早く捉えられる角度であり<sup>1</sup>、また蒸暑い京都の夏を快適に過ごす際にも妥当な方位角といえる<sup>2</sup>。

古書院において、主人が生活をするための「一の間」と接客に使用される「二の間」は最も重要であり、両部屋は庭に直接面し、「一の間」は「二の間」よりも採光条件の良い南面に配置されている。庭との境界に設けられている縁は、納涼としての機能を果たしており、そこからは三方向へと飛石の道が延びている。サービス機能を持つ「茶湯所」と「焼火の間」は、「一の間」と「二の間」に接する<sup>3</sup>こと、及び東側の庭に

は直接面する必要がないこと、という二つの要求によって配置されている。そして「上り場」「湯殿」「厠」及び「台所」は、東側の庭から最も離れた位置に配置されており、ここに、東側の庭を起点とした各部屋の配置に関する序列を見ることが出来る。(図2)

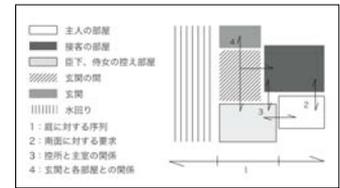


図2 第一期造営時の平面ダイアグラム

#### 2. 2 第二期造営

当時荒廃が著しかった桂離宮の再興とそれに伴う中書院の増築には、多くの客を招く<sup>4</sup>こと及び親王自身が養生を行う<sup>5</sup>ことが背景にあった。

古書院の居室は接客のための部屋として、増築部である中書院は主人のための部屋として計画されており<sup>6</sup>、そこには私的空間と公的空間の分離という要求がみられる。中書院は古書院の南西側に増築されているが、夏季の納涼及び私・公の分離という要求からすると妥当である<sup>7</sup>。また、第一期と同様、サービス用の部屋に生じる要求から、古書院と中書院とを直接的に繋がせたと考えられる<sup>8</sup>。(図3)

古書院と中書院との間にある約五寸の段差は、互いを区別し<sup>9</sup>、「焼火の間」は古書院と中書院の居室及び縁を分離している。さらに中書院の縁には庭へ降りる箇所がなく、勾欄が取り付いているため、庭との関係は古書院より若干希薄であり、そこにおいても私・公の分離という要求が見受けられる。

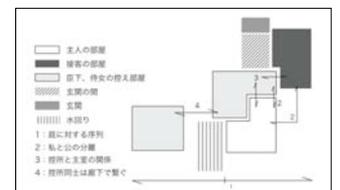


図3 第二期造営時の平面ダイアグラム

#### 2. 3 第三期造営

第三期造営は御水尾上皇を正式に迎えるための造営であり、新御殿は上皇の生活の場として建てられたとされている。

中書院と新御殿との間に楽器の間を取り合いとして挿入することで、新御殿を最も私的な空間として位置づけている。部屋の数も古書院や中書院に比べて増加させている。加えて、サービス用の部屋を取り囲むように配置したことが、雁行形を形成する要因の一つとなっている。(図4) また、部屋の配置に関しては、関係性が複雑になっているが、第一期、第二期と比較しても変化することはない。一方、御殿に格式を与えるという要求によって中書院、楽器の間、新御殿と庭との関係<sup>10</sup>は、第二期造営時以上に希薄となる。

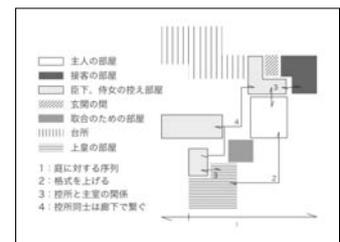


図4 第三期造営時の平面ダイアグラム

### 3. 御殿を觀賞する視点から生じる要求

桂離宮の御殿の外観構成に関して、先行研究者が分析している部分を抽出し、分析を行う。その際、梅の馬場及び中島からの見え方を、三度の造営毎に再現したスケッチを扱うこととする。<sup>11</sup>

#### 3. 1 第一期造営

古書院の立面構成は「非対称による美」として称賛されている。ブルーノ・タウトは、古書院の立面の美しさが、左右対称な破風に対する軒下部分の非対称性によるものであると指摘している。つまり非対称による美とは、左右対称の破風と左右非対称の軒下空間との関係性によって構築されていると考えられる。すなわち、使用者の要求によって非対称に構成される軒下空間を、中島から見た際に如何に統合させて構成するかということが、第一期造営時における觀賞者の要求である。(図6)



図5 中島からの視点 (第一期造営時)

#### 3. 2 第二期造営

中島からの視点：庭園側の景観を崩さない<sup>12</sup>ようにしたいという要求により、中書院を平入りの屋根で構成し、量感を抑え、古書院の左後方、つまり南東方向へ配置した。(図6)



図6 中島からの視点 (第二期)

梅の馬場からの視点：中書院をほぼ同じ量感で増築し、その構成を古書院と対照的にすることで、それを付加的なものとしてではなく、両者を統合的に構築した。(図7)



図7 梅の馬場からの視点 (第二期)

#### 3. 3 第三期造営

中島からの視点：第二期と同様に、基本となるのは庭からの景観を崩さないという要求である。また、中書院と新御殿とをそれぞれほぼ等間隔で配置することで、階調を生み、第二期以降続く要求を新たに展開させたと考えられる。(図8)

梅の馬場からの視点：増築した御殿を既存の御殿と統合させるという要求である。高さの相違と、対照性とをさらに展開し、障子と縁の下部との構成による凹凸も加え、複雑なコントラストを生んでいる。(図9)



図8 中島からの視点 (第三期)



図9 梅の馬場からの視点 (第三期)

以上のように桂離宮御殿においては、三度の造営毎に全く異なる二つの要求に適合した整合性のある形態が構築されている。つまり、それらの異なる要求の統合こそが設計者の意図であったのである。

### 4. 残り一つの視点

桂離宮御殿には上述の二つの要求の他に、もう一つの要求が存在していた。それは庭を觀賞する際に生じる觀賞者の要求である。第一期造営時における使用者の要求が月見であったことから分かるように、外部を觀賞するという要求は、桂離宮御殿の形態の決定に影響していると考えられる。

### 4. 1 庭を觀賞する視点から生じる要求

桂離宮の御殿においては、それぞれの主室から直接庭を觀賞することができ、それは三度の造営毎に通じている。そして古書院から新御殿にかけては、庭に設けられた池から徐々に遠ざかるように配置されている。つまり、主室から庭を觀賞する際に生じる要求によって、劇的な景観から日常的な景観へと、觀賞対象の序列化を図っているのである。また、古書院の月見台は第一期造営時以降、桂離宮の庭全体を見渡すことのできる唯一の場所である。そしてそれらは中書院、楽器の間、新御殿が南西側へ雁行形に増築された要因として考えられる。

#### 4. 2 使用と觀賞という視点から生じる要求の統合

上述の通り、桂離宮御殿において最も特徴的な雁行形配置には、庭を觀賞するという觀賞者の要求も働いていたのである。まず、最も私的空間としての性格が強い新御殿の主室においては日常的で簡素な庭を觀賞することができる。つまりここで、それぞれの主室から異なった庭を觀賞するという要求と、私・公の分離という、御殿に生じる使用者の要求との間に、関係性を見出すことができる。一方、古書院の月見台から庭全体を觀賞するという要求は、造営毎に通底していた。つまり、中島からの庭の景観を崩さずに古書院を軸として増築部分を設けるという、御殿に生じる觀賞者の要求と、月見台からは必ず庭全体を觀賞できるという要求とは、互いが月見台を軸にして觀賞し合うこととなり、そこにおいても関係性を見出すことができる。以上より、御殿に生じる使用者の要求と觀賞者の要求とは、庭を媒介とした関係性が存在するといえる。そしてその関係性こそが、桂離宮の御殿に見られる最も特徴的な形態である雁行形を構築したのである。庭に生じる觀賞者の要求とは庭の美しさに対するものではあるが、一方で、どのような場面で庭を觀賞するかという、間接的に御殿を使用する視点から生じる要求ともなる。そしてそれは、御殿に生じる異なる二つの要求を客観視できる唯一の視点であり、その視点によって両者は統合されるのである。



図10 御殿に生じる要求の統合

### 5. 結論

桂離宮御殿における、使用する視点から生じる要求と觀賞する視点から生じる要求とを分析し、明確化することで、その形態が両方の要求に適合したものであることが分かった。またそれらの二つの要求を繋ぎ合わせ、統合しているものは、庭を觀賞目的とし、間接的に御殿を使用するという視点から生じる要求であった。そしてそれら三つの要求を関係づけ、形を構築することが桂離宮御殿における設計者の意図だったのではないだろうか。それは三度の造営の度に再構成され、桂離宮御殿の全体性を築くことになるのである。

邦辻哲郎『桂離宮一様式の背後を探る』(中央公論社1958) p89. / 森道『新版桂離宮』(創元社1956) p171. / 青藤英俊『桂離宮/日本建築の美しさの秘密』(草思社1993) p15. / 同註4 p40. / 久垣秀治『桂御所』(新潮社1962) p321. / 同註4 p40. / 川道麟太郎『雁行形の美学』(彰研社2001) p150, p163. 川道は雁行形配置の機能的な側面について、私・公の序列化と採光・通風の確保をあげている。 / 所領に関わる事務、侍女の生活の場、という機能を持つ「役所」及び「御厨」は、母屋とは廊下によって間接的に繋がっている。 / 同註6 p322. / 中書院と新御殿の縁には障子を建て内部化し、楽器の間は濡れ縁とするが、それら全てが庭と直接通じていない。 / 中島は御殿を觀賞する代表的な地点であり、多くの称賛がなされる。梅の馬場の視点により御殿の立面構成を分析することができる。 / 磯崎新「桂—その両義的な空間」『桂離宮—空間と形』(岩波書店1983) p16. 磯崎は「新しく増加する容量を接続させながら、庭園側の光景を崩さないためには、この雁行配置は最適解である。」としている。